

# 入れ墨（タトゥー）の歴史と社会における受容に関する一考察

藤岡美香子\*

## A Literature Review of The History of Tattoos and Their Acceptance in Societies

by

Mikako FUJIOKA

### Abstract

The number of tourists visiting Japan has been growing, reaching approximately 30 million in 2018 and is expected to be more than 40 million in 2020. However, there have been reports concerning troubles occurring due to differences in cultures or life styles. One such problem regards the bathing in public, at bathes and hot springs, by people with tattoos. In Japan, people with tattoos are often prohibited to bathe in public even if they wear tattoos based on their cultural traditions. Consequently, there have been complaints among both foreign tourists and Japanese people that the Japanese rules and traditions are too rigid, inhospitable and do not respect the traditions of other cultures. Considering these problems, in 2016, the author conducted a survey, analyzed how tattoos are viewed in Japan and presented the results. She found that; Japanese people do tend to have negative attitudes towards people with tattoos, but younger people are more tolerant about tattoos and that it is more acceptable in cases of tattoos on foreign people.

However, in the research to follow, this author has come across many documents and theses indicating that tattoos are not necessarily widely accepted socially in some foreign societies either. It might not be justified to argue that tattoos should be accepted and respected merely because they are cultural traditions. This paper summarizes documentation about the history of tattoos and how they have been viewed in other cultures as well as in Japan, and aims to serve as a basis for the future studies on the socio-cultural implications and considerations regarding people with tattoos.

---

\*東海大学経営学部観光ビジネス学科専任講師

## 1. 研究の背景と目的

日本を訪れる外国人観光客が 2018 年には約 3,000 万人となり、2020 年には 4,000 万人超と予測される中、様々なマイナス面も表面化してきている。観光客数が増えすぎたことで起こる問題もあれば、文化の違いによるトラブルもある。後者の 1 つに、入れ墨 (タトゥー) がある人の公衆浴場やプールなどの公共施設の利用に関するものがある。筆者は 2016 年、訪日外国人旅行者がより快適に日本で過ごすための環境整備への示唆を得ることを目的として、九州在住の 348 人を対象に、入れ墨 (タトゥー) のある人に対する印象と入れ墨 (タトゥー) がある人が公衆入浴施設を利用することに対する意識調査を行った (藤岡 2017)。その結果、入れ墨 (タトゥー) のある人が日本人の場合、日本人でない場合のどちらも、男性は「不快感」、女性は「怖さ」を感じる人が多いこと、しかし、年代による違いも大きく、若年層ほど入れ墨 (タトゥー) を特別に意識しない傾向があることもわかった。また、入れ墨 (タトゥー) がある人が日本人でない場合には、入れ墨 (タトゥー) に対する印象も多様で、より寛容に受け止められているという結果を得た。この結果をもとに藤岡 (2017) は、日本では 2019 年から 2020 年にかけて、ラグビーワールドカップ、女子ハンドボール世界大会、そしてオリンピック・パラリンピックが開催予定であること、また、日本に在留する外国人の増加も予想されていることから、外国人側の入れ墨 (タトゥー) に対する意識調査を行う必要性を論じてまとめた。

筆者は、その後の継続研究の中での資料収集において、日本での入れ墨 (タトゥー) に対する認識と外国での認識の差があることは確かだが、外国でも必ずしも好意的に受け入れられているわけではないことを示す複数の文献を入手した。また、欧米人の「スポーツ選手やアーティストの大きなタトゥーは不快だ」というコメントも耳にした。そして、日本では、入れ墨 (タトゥー) は反

社会的なものとして認識される傾向が強いが、外国では、文化的または宗教的背景があるもの、またはファッションとして一般社会で受容されている、というのは単純化しすぎであり、「外国人の入れ墨 (タトゥー) は彼らの文化であるから、尊重して受け入れるべき」という主張には必ずしも妥当性がない可能性があるという考えに至った。

そこで本研究は、先行研究や資料をもとに、諸外国での入れ墨 (タトゥー) の歴史と受容状況をまとめ、現在実施中の訪日外国人の入れ墨 (タトゥー) に対する意識調査の基礎とすることを目的とする。

本稿では、「入れ墨」「いれずみ」「タトゥー」という表現が混在する。基本的に、英語での論文や資料で *tattoo* とされていたものは「タトゥー」とし、日本語の論文、資料に関しては、使用されていた表現をそのまま使用している。

## 2. タトゥーの歴史

本節では、タトゥーがどこから、どのように広がり、様々な文化の中でどのように受け止められてきたのかを、Sanders and Vail(2008)における記述をもとにまとめる。

### 2.1 古代タトゥーの広がり

石器時代末には行われていたという考古学的証拠が存在する。紀元前 2000 年に、中東からインド、中国、日本へと広がり、アイヌと接触したサモア人探検家がフィジー、オーストラリア、ニュージーランド、ハワイ諸島へ持ち込んだという説と南米の探検家がポリネシアやニュージーランドに持ち込んだという説がある。いずれにしても、紀元前 1000 年には装飾として確立していたとされる。

### 2.2 日本でのタトゥーの歴史

装飾としてのタトゥーが最も美しく、素晴らしい技術を持って行われているのが日本だとされ

ている。その日本でのタトゥーの歴史は、紀元前5世紀の埴輪に描かれているが、5世紀頃までには初期のタトゥーは消え、13世紀に犯罪者や社会的に望ましくない人間の記号として復活した。

18世紀半ばには『水滸伝』が人気を博し、その中の登場人物がタトゥーをしていることで、江戸時代の人々が浮世絵師からタトゥーを入れてもらうようになった。

19世紀半ばには、明治天皇によって禁止される。開国したばかりであったため、訪日外国人に野蛮だと認識されるのを恐れてのことだったが、その美しさと技術に魅了された外国人は、日本でタトゥーを入れることを希望した。禁止令以降、タトゥーは地下にもぐり、労働者、職人、犯罪者、芸人、火消しの中で行われ、やくざに好まれた。一般社会では忌避されたが、その芸術性は非常に高く、西洋の現代ボディアートに大きな影響を与えたことは間違いない。

### 2.3 西洋のタトゥーについて

イギリス諸島にいた原住部族がタトゥーをしていたことがジュリアスシーザーの回顧録に残っている。戦いの中で彼らと接触したローマ人がタトゥーを行うようになり、その後軍隊内で流行した。

8～10世紀は教会によって禁止されたが、イスラム教徒との聖地争奪戦の中、キリスト教徒であることを示すタトゥーが再び行われるようになり、18世紀まで西洋文化においてタトゥーを施す唯一の正統な理由となった。

現代の西洋のタトゥーの歴史は、1769年、クック船長が南太平洋へ航海し、原住部族のタトゥーに出会ったことで始まる。この航海の船員がタヒチで旅の記念にタトゥーを施してもらい帰国した。2度目の訪問の際には、広範囲にタトゥーを施したタヒチのプリンス、オマイを、クック船長が連れて帰国、展示し、英国上流階級のたいなる好奇心の的となった。

それまで西洋では、肌に傷をつけ染料を使って図柄やメッセージを施す行為を *pricking* と呼んでいたが、この時クックがタヒチの言葉で *to strike* や *to mark* を意味する *ta-tu* を紹介し、*tattoo* が一般的な用語となった。

19世紀中ごろは、ヨーロッパの中流階級はタトゥーの流行にあまり影響されず、入れる人の多くは船員、職人、軍人、貴族階級であった。そして19世紀末、ヨーロッパのタトゥーはアメリカへ広がっていく。彫師がニューヨークにアトリエを構えるようになり、日本から招かれる彫師もいた。電動のタトゥーマシンが開発され、彫師、タトゥー人口とも急増した。

しかし、20世紀初めにはアメリカのエリートの間ではタトゥーは人気がなくなり、評判の悪い地域に出入りするいかがわしい階級の下品な趣味とされ、社会の末端のサブカルチャー内で人気が上昇していった。20世紀半ばまでには、タトゥーを入れることは社会規範を逸脱した行為として大衆にはっきりと認識され、タトゥーは、社会の末端で生き、規範を守らない階層出身者の印とみなされた。

### 2.4 「タトゥー・ルネッサンス」

タトゥーが商業主義的で、一般的には、規範を逸脱した行為と見なされる傾向が続く一方、1960年代には、芸術を学んだ若手のタトゥー彫師が表現の1つの形としてのタトゥーを模索し始めた。これが、技術の向上にもつながり、美術館やギャラリーに展示されることで、合法的なものとしての地位を得るようになっていく。彫師の社会的地位も上がり、客層も向上、結果として経済的にも豊かになった。これらの流れがタトゥーの権威復興として、『タトゥー・ルネッサンス』と呼ばれている。

### 2.5 1980年代の変化

1980年代もタトゥーにとって大きな変化の時

期となった。医者、弁護士、聖職者、主婦、大学教授にタトゥーを入れる人が増加し、また、タトゥーの芸術性が向上したことで、タトゥーにまつわるマイナスのイメージや評価は減少し、公共の場で自身のタトゥーを見せることを希望する人も増えた。結果として、タトゥーは「社会規範を逸脱した行動」から「大衆文化の1つ」として普及していった。社会的に容認されたふるまいや容貌を拒絶したいという個人の願望の象徴だったタトゥーだが、大衆文化の1つと位置づけられることにより、周囲の人々にショックを与えたり、不快感を与える力は減少していった。

### 3. 外国での調査・研究事例

前節では、入れ墨(タトゥー)の広がり和社会においてどのように認識されてきたかを時系列に沿って概観したが、本節では、現在入れ墨(タトゥー)が各文化圏でどのように受容されているかを示す調査・研究事例を挙げる。

#### 3.1 スペイン

2018年6月、軍勤務心理職の採用試験において、女性受験者の1人が、足の甲にあるタトゥーが制服着用時に見えるという理由で受験中止を告げられた。スペイン陸軍の規則によると「制服着用時に見えるタトゥーやピアスは禁止」となっている。パンツスタイルの制服もあり、女性職員にスカートの制服着用を義務付けているから起こる問題であるとして、男女平等の観点から不服申し立てがなされている。

#### 3.2 ニュージーランド

秦(2013)によると、原住民マオリの伝統的タトゥーはモコと呼ばれ、ヨーロッパ人が渡来し、接触するようになって以降、その文化は断絶した。1960年代の文化復興運動の結果復興したが、「グローバルな広がりを持つタトゥーは、商業的、ファッション、飾りに過ぎず意味を持たない」とし

て、伝統的なタトゥーであるモコとは異なるものと認識されているようだ。

#### 3.3 英国

TATTOOS IN THE WORKPLACE: WHY DO EMPLOYERS STILL CARE?によると、現在、英国人成人の20%がタトゥーを入れているという統計がある。その状況下、企業の採用担当者500人への調査を行ったところ、88%が「タトゥーが採用や昇進等にマイナスになる可能性ある」と答え、そのうち40%は実際に、見えるところにあるタトゥーを理由に不採用にした経験あるという結果が出た。その理由としては、「業界がタトゥーに対して不寛容」47%、「タトゥーは、プロ意識の欠如の表れ」46%、「厳しい服装規定がある」41%が挙げられている。

#### 3.4 アイルランド

2015年にMatrix Recruitmentが200人の人事担当者を対象にした調査によると、「タトゥーは採用にも昇進にも影響しない」とする意見が約54%あったのに対し、36%は「タトゥーやピアスは好ましくない」と答えており、否定的な意見も相当数あることがわかる。また、自己表現が重視されるようなクリエイティブな業界ではより好意的に受け止められているが、日常的にスーツを着用することが期待されるような業界においては好ましくないという業種による受容の違いも浮き彫りになっている。

#### 3.5 米国とスコットランド

薄上(2016)は、米国やスコットランドで行われた実験結果を整理して、就労年齢のタトゥー人口が増加している一方、顧客サービスの観点から、採用側はタトゥーをした人を低く評価する傾向があり、特に、女性のタトゥーは、男性の場合よりも厳しい評価を受けていること、多くの組織が「体の見える部位にあるタトゥーは隠す」「悪質

なメッセージや図柄のタトゥーは禁止」といったタトゥーポリシーを明示していることも紹介している。

### 3.6 アメリカ

TATTOOS IN THE WORKPLACE STATISTICS には、76%の被雇用者が、タトゥーやピアスが原因で採用面接がうまくいかないと感じているというデータがある。

### 3.7 タイ

前国王の死後、敬愛の念を示すためのメッセージやイメージをタトゥーにする若者が多くいたことが報道された(『熊本日日新聞』 2016.10.21 夕刊)。一方、津村(2016)は、東南アジア、オセアニアは古くよりタトゥー実践が行われてきた地域だが、現在のタイでは、人の目に触れるところにタトゥーがある者は反社会的な存在だとみなされることが多いとしている。

### 3.8 サモア

2019年4月5日付 *Pacific Standard* の記事 *It's Amazing Tatau's Persisted: How Samoan Tattooing Withstood Colonialism* には、フィジーやトンガなど他のポリネシア諸島と比較しても、サモアのタトゥー (tatau) の社会における重要性の高さが紹介されている。3000年以上の歴史があり、200年前にヨーロッパからキリスト教の宣教師が渡来し、「野蛮で、異教的」として禁止し、その風習を根絶しようとしたにもかかわらず、存続した。

サモア社会において、タトゥーを施す *pe'a* は、サモア男性に、成人として村の酋長のために義務を果たす権利を与える重要な通過儀礼であり、タトゥーは男性の強さと勇気の証、将来の伴侶にとって、より望ましい相手であることを示す意味も持っている。タトゥーなしでは一人前の男性になることはできないのだ。

また、海外で暮らすサモア系の人々にとって、タトゥーは先祖の島と自己を結び付け、サモア人としての自己認識をさせてくれる存在であることも紹介されている。

## 4. 日本での調査・研究事例

前節では、日本以外の文化圏で入れ墨 (タトゥー) がどのように受容されているかを示す調査・研究事例を紹介したが、本節では、日本国内の調査・研究事例を挙げる。

### 4.1 西山(2007)

タトゥーを含む身体加工について、日本における伝統的身体加工と現代的身体加工を比較して論じている。伝統的な身体加工はきわめて共同体的なもので、部族社会のメンバーに義務的に課される。本人の好き嫌いで決めることではなく、その社会で果たすべき役割を引き受けた者であれば否応なしに行うもので、そうしなければ、その社会の一員とはなれない。それに対し、現代の身体加工は「ファッション」であり、非常に個人的で、そうすることにあまり社会的な意味を持たないとしている。

### 4.2 岡部(2012)

岡部(2012)は、外国人スポーツ選手の間に入れ墨が流行している風潮から、スポーツ選手の入れ墨について考察している。その中で、アメリカでは1960年代後半、既成の社会概念や価値基準を否定したヒッピー文化に、ドラッグ使用とともに反社会的な行為の1つとして入れ墨が取り入れられたとしている。また、日本の暴力団に限らず、中国系の幫、ロシア系マフィア、アメリカのKKKなどで多くの構成員が入れ墨をしていることから、入れ墨は日本だけでなく広く、反社会的勢力や組織の構成員であることの象徴になっているとしている。

スポーツ選手の入れ墨に関しては、ドイツ人コ

一チの話として、ドイツのフットボール選手の入れ墨は 1990 年代に入ってからのもので、一種のファッション感覚である点、消せないような入れ墨は後悔するかもしれないという意識も有している点を紹介。アメリカ社会に関しても、入れ墨を全面的に容認しているわけではなく、最近までは軍隊へ入隊が許されなかったり、ニューヨークヤンキースが原則「長髪、不精ひげ、入れ墨」を禁止していることなどを紹介している。

#### 4.3 岡林他(2018)

岡林他(2018)は、都内私立大学1、2年生約300人を対象に、若年層におけるタトゥーとピアスへの抵抗感を公共空間という視点から分析し、次の結論を導いている。

- ・タトゥーに対する抵抗感は確固として存在している。
- ・外国人よりも日本人が入れているタトゥーに対する抵抗感が大きい。
- ・公共空間の中でも、銭湯・スパ・サウナなど「入浴」に関係する空間や海・プール・スポーツジムなど「身体活動」に関係する場合の抵抗感が強く、タトゥーへの抵抗感の強さは露出度と関係する可能性がある。

#### 4.4 鈴木他(2018)

鈴木他(2018)は、入れずみ経験者と未経験者を比較し、経験者の特徴を明らかにすることを目的とした研究を行っている。まず、アメリカでの18～50歳500人を対象とした調査(Laumann & Derick 2006)を紹介し、タトゥーをしているのは男性26%、女性22%で、収入が低いほど、また若いほど入れている人が多い、入れている人が懲役を受ける期間が長く、脱法薬物をより用い、学歴が低いという傾向が見られたとしている。また、タトゥーに対して「反抗的」というイメージを持っている人が40%、子どもがタトゥーを入れることに反対している人が37%おり、アメリカで

も広く許容されているとは言えない現状を示している。

鈴木他自身の研究結果としては、現代日本で入れずみの経験者は数パーセントとした上で、経験者のほうが、入れずみは社会的に受容されていると認識している点、経験者は社会規範や社会からの受容の程度に重きを置いていないという結果を得ている。その上で、入れずみも装いと同等に文化差があり、入れずみという装いの理解は現代社会では重要で、入れずみをとおした異文化の理解が大切であるとも述べている。

#### 5. 考察

前節までで取り上げた先行研究や資料をもとに、諸外国での入れ墨(タトゥー)の歴史と受容状況について考察を進めたい。

まず、サモアでのケースがそうであるように、入れ墨(タトゥー)を入れることが成人としての証であり、部族社会の中で一人前の人間として責任をまっとうしていく権利を与えられるという、民族や地域の重要な通過儀礼としての意味を持つ入れ墨(タトゥー)がある。3.2で取り上げたように、ニュージーランドの原住民マオリ族にもモコと呼ばれる伝統的な入れ墨(タトゥー)があり、世界的に広がっている入れ墨(タトゥー)に対しては、「商業的、ファッション、飾りに過ぎず意味を持たない」と自分たちの伝統的なものとは異なると認識している。

それに対し、民族や地域の風習に根差さない入れ墨(タトゥー)には、歴史的に見て、社会規範への反抗のシンボルであったり、他者に対する威嚇の道具であったり、また芸術性に魅了されたファッション、富や権威の象徴という意味があった。いわゆる「自己表現のための入れ墨(タトゥー)」だと言える。

この両者は、資料に基づいて判断すると、世界的に後者が多数派であり、重要な伝統文化として入れ墨(タトゥー)を有する民族は、ファッショ

ンや商業主義的なものと区別しているようである。

次に、欧米諸国を中心に資料で提示した自己表現の入れ墨（タトゥー）は、それぞれの社会の中で、教会や為政者によって禁止されたり、「野蛮なもの」「下層階級のもの」「犯罪や反社会的な行為に関連するもの」という評価を受け、社会で受容されない行為としての歴史が長かったことがわかる。途中、芸術性が認められ、評価が高まったり、ブームとなった時期はあったが、基本的には1980年代に入るまで「社会規範を逸脱した行動」と認識されることが多かった。1980年代に、社会的に評価の高い職業に就く人の中に入れ墨（タトゥー）を入れる人が増加し、また、入れ墨（タトゥー）の芸術性が向上したことで、マイナスのイメージや評価は減少し、入れ墨（タトゥー）人口が増加した。結果として、入れ墨（タトゥー）が「大衆文化の1つ」として普及していくこととなった。

しかし、その流れの中にあってもまだ、社会において完全に受容される行為となっているわけではなく、特に就職に関しては、入れ墨（タトゥー）の有無が懸念されることは第3節の様々な事例から明らかである。

以上のことから、サモアやニュージーランドの先住民マオリ族のように、入れ墨（タトゥー）が風習の一部であるところと、過去20～30年の間に様々な段階を経て、受容されるようになってきたものがあり、一括りにできないことは明らかである。単に、日本の文化と外国文化における入れ墨（タトゥー）に対する認識や受容が異なるという問題ではないようだ。

社会における入れ墨（タトゥー）の受容度は、時と共に変化してきた。欧米諸国では、入れ墨（タトゥー）人口の増加に伴って、受容度が上がったのは確かであり、そのため、日本人の目には、欧米人の入れ墨（タトゥー）は一般的なものであり、社会で完全に受容された行為だとうつつる傾向が

ある。しかし決してそうではなく、日本での受容と比較すると数十年進んでいる、というのが妥当なところではないだろうか。

藤岡(2017)でも明らかになったように、日本人の入れ墨（タトゥー）に対する認識も年齢や対象者によって異なる。時と共に変化する社会の中での受容度については、経年調査を行っていくことが必要だと考える。

## 6. まとめ

訪日外国人観光客の増加に伴うトラブルの1つとして、日本では入れ墨（タトゥー）がある人が温泉等の公衆浴場を基本的に利用できないというものがあり、観光庁が訪日外国人観光客と入浴施設の両方に理解を求め、摩擦を減らす方向性を模索している。そのような状況下、筆者は2016年に、入れ墨（タトゥー）が日本人からどのように認識されているかの意識調査を行い、その後の継続研究の中で、「日本では反社会的なものとして認識される傾向が強いが、外国人の入れ墨（タトゥー）は文化的背景があるので、尊重して受け入れるべき」という現在の日本で頻繁に聞かれる主張に必ずしも妥当性がない可能性を示す多くの資料を入手した。本稿は、それらの先行研究や資料をもとに、諸外国での入れ墨（タトゥー）の歴史と受容状況をまとめることを試みた。

入れ墨（タトゥー）を入れることが重要な伝統文化であるのは、サモアなどポリネシア諸島やニュージーランドなど一部であり、長く欧米では自己表現の1つとしてとらえられてきた。基本的には、「社会規範を逸脱した行為」として禁止されたり、一般社会では受容されないものだったが、1980年代に、入れ墨（タトゥー）人口の増加や芸術性の向上から普及し始め、「大衆文化の1つ」となりつつある。しかし、入れ墨（タトゥー）のある人は就職において不利になるなど、未だ完全に受容された行為とはなっておらず、「外国では一般的なことであるにもかかわらず、日本でのみ

厳しい受け止め方をされる」と言い切ることはできない現状であった。

3.8 で述べたように、入れ墨(タトゥー)が文化の必要不可欠な要素となっているサモアが、2019年に日本で行われたラグビーワールドカップに出場した。代表チームのほとんどの選手が手足に目立つ大きなタトゥーを入れていたが、日本文化で入れ墨(タトゥー)がどのように認識されているかを理解し、「ホスト国への敬意を表すため、タトゥーを隠すスキンスーツを着用することにした」と報道がなされた。ジャック・ラム主将は、「自分たちの多くはタトゥーをしていて、これは母国の文化ではごく普通のこと。しかし日本の文化を尊重したいので、受け入れられるよう心掛ける」と述べ、チームマネージャーのアロイ・アレサナ氏は「サモアでは、男子は全員ある年齢になると、集団に属し、酋長に従う証としてタトゥーを入れる」しかし、「どこへ行ってもその土地の文化を尊重しようというのがわれわれのモットー」と述べた。

このサモア代表チームのように、自分たちの大切な文化の一部ではあるが、そうではないところ、それが悪感情を引き起こす可能性があるところでは、相手の文化を尊重する対応が取れるというのは、非常に高い異文化理解、多文化共生能力の表れである。これが、年間4,000万人という訪日外国人観光客と彼らを迎える日本人の双方に求められる姿勢ではないだろうか。

#### 参考文献

薄上二郎(2016)「欧米におけるタトゥーと雇用管理の考察：日本企業は欧米の実態から何を学ぶか」『異文化経営研究』(13) pp.1-14

岡林誠士他(2018)「女子大学生における他者の身体装飾への意識～タトゥーとピアスを中心として～」『繊維製品消費科学 Journal of the Japan Research Association for Textile End-Uses』Vol.59 pp.542-550

岡部修一(2012)「現代スポーツを考えるースポーツ選手の入れ墨が影響するものー」『奈良文化女子短期大学紀要』(43) pp.175-183

鈴木公啓他(2018)「いれずみ(タトゥー・彫り物)の経験の実態および経験者の特徴」『対人社会心理学研究』18 pp.27-34

津村文彦(2016)「見えないタトゥーをもつこと 東北タイにおけるサックヤンにみる可視と不可視」『日本文化人類学会研究大会発表要旨集』2016(0)12

西山哲郎(2007)「現代の身体加工にみる自己アイデンティティ構築のエコノミー」『中京大学現代社会学部紀要』1-2 pp.121-139

秦 玲子(2013)「ニュージーランド・マオリのタトゥー、モコの復興 人々はなぜ、もう一度モコを刻んだのか」『日本文化人類学会研究大会発表要旨集』2013(0)31

藤岡美香子(2017)「訪日外国人旅行者の快適な日本体験のための環境整備に関する一考察 入れ墨(タトゥー)がある人の公衆浴場利用の視点から」『東海大学経営学部紀要』第5号 pp.11-21

「海外こぼれ話—敬慕の印」 『熊本日日新聞』  
2016年10月21日夕刊

<https://blog.jobbio.com/2018/03/22/tattoos-workplace-employers-still-care> アクセス日 2018.3.22

Laumann, A.E., & Derick, A.J. (2006) 'Tattoos and body piercings in the United States: A national data set' *Journal of the American Academy of Dermatology*, 55, pp.413-421

Sanders, Clinton R. and Vail, D. Angus (2008) CUSTOMIZING THE BODY Revised and Expanded Edition, Temple University

#### 参考 URL

It's Amazing Tatau's Persisted': How Samoan Tattooing Withstood Colonialism,  
Pacific Standard, 2019.4.5  
<https://psmag.com/social-justice/colonialism-could-not-kill-the-samoan-tattoo>

Tattoos and their perception in Irish workplaces  
<http://thecircular.org/tattoos-perception-irish-workplaces/> アクセス日 2018.9.10

Tattoos in the work place  
<https://www.irishtimes.com/student-hub/tattoos-in-the-work-place-1.2833916>  
アクセス日 2016.10.21

TATTOOS IN THE WORKPLACESTATISTICS  
<http://www.stapaw.com/tattoos-in-the-workplace-statistics>, アクセス日 2018.9.10

TATTOOS IN THE WORKPLACE: WHY DO EMPLOYERS STILL CARE?